

ボランティア便り

第1号 (年3回発行)

《「広がれボランティアの輪」 連絡会議 30周年記念 ボランティア全国フォーラム特集》

2024年9月7・8日の両日、仙台市にて、ゆるい民間支援団体の連絡会議「広がれ」ボランティア全国フォーラムが開催され、約400名のボランティアが集い、経験交流が行われました。当会も代表として、浦川豊彦会長と松田光司理事・久留米大教授の2名を派遣しました。

9月7日第1日目 全体会 「歴史」

「かつてボランティア活動が行政の補完機能、それも安価な労働を提供しているだけで、単に「可哀想な人たち」を助ける善意の活動としか見られてこなかった歴史があります。しかし、ボランティア活動を通じて学んだ知恵は、尊い人類の英知として、世界中の人たちが凡て共有すべき財産です。」(中田武仁 国連ボランティア終身名誉大使・後述)

日本におけるボランティア活動の歴史を

紐解くなら、公的には1993年当時の厚生省がボランティア事業として初の予算を付けたのが正式な始まりとされます。



第30回広がれボランティアの輪全国フォーラム@東北福祉大

しかし実際には、1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災の救援活動に数多くのボランティアが被災地に駆けつけ、救援と復興にボランティアが欠かせない存在であることが、広く国民に認識され、これをもって「ボランティア元年」と言われています。

その時、無秩序な支援では極めて効率が悪いことからコーディネーター(調整役)の重要性が認識され、海外では赤十字社/赤新月社が担っている代わりに、日本では日常的に地域との繋がりが強い各自治体の社会福祉協議会が担うことになりました。そして、その後の大災害とともに発展・変化してきたのです。

民間ボランティア団体の日常的活動に、制約や活動の継続性に障壁があるため、他の先進国に倣って1998年に、「特定非営利活動促進法」(NPO法)が成立し、ようやく行政とボランティア、NPO法人との対等なパートナーシップの基礎ができました。

1993年カンボジア初の総選挙の監視員活動中、凶弾で殉職された中田厚仁さんの父親中田武仁さんが息子の意思を継ぎ、外務省に働きかけ、国連で日本が提案した2001年国連「ボランティア国際年」が実現しました。

未曾有の大災害「2011年東日本大震災」では、各市町村の災害ボランティアセンタ(V)Cが拡大ネットワーク化され、JCN(東日本大災害支援全国ネットワーク)が設立されました。その後毎年、豪雨災害、熊本地震と今年の能登半島地震などの自然災害に加え、2020年から新型コロナウイルスパンデミックでは逆に多くの団体が活動抑制・停止を余儀なくされました。

ボランティア活動は、誰でも参加できる活動であって欲しいのですが、格差社会で参加できない、あるいは人口減少社会での孤立・孤独、貧困の深刻化、活動の見直し、価値や意義の再考が求められ、「広がれ」では昨年からの後のあり方検討委員会を開催し、検討提言をまとめてきました。

【特別講演 「わたしにできること」をつなぐ】講師：村木厚子 全国社協会長

冤罪事件で2010年に無罪判決を受けた元厚生労働省事務次官の村木厚子さんによる特別講演でした。彼女は公的に支援する側から、一夜にして「支えられる存在」になったのです。その時必要だったのは、弁護士などのプロの支援(課題解決型支援と伴走型支援)、インフォーマルな支援(家族、友人、同僚等)でした。また、支えられるだけでは元気になれない、誰かのために支えることも大切と悟りました。

無罪判決の後は、市民活動にも関わり始めました。反省として、「〇〇(役所など)として何をすべきか」ではなく「みんなが何ができるか」の発想することです。

行政依存型社会から市民を中心においた市民自立型社会へと、社会システムは変化しています。そして、「自立」とは依存しないことではない。「自立」とはたく

さんのものに少しづつ依存できるようになることである(熊谷晋一郎東大先端科学技術研究センター教授)と言う名言で1時間の講演を結びました。

【シンポジウム ボランティアは文化として社会に定着したか】

大学3年生の藤原睦己さんは、地域の課題解決を目指し、松江の高校生12人で4年前にNPO法人KEYSキーズを設立、現在学生だけの25名、ことも主導の活動に大人も巻き込むことを目指して各種のイベント、事業を企画・提案・運営を行い、若者が地域を支え、地域が若者を育てる活動を実践しています。

次は久保田翠さん。重度の知的障がい児を長男「たけし」 出産を契機に、2000年浜松市にNPO法人クリエイティブサポートレッツ設立、障がいや国籍、性差、年齢などあらゆる違いを乗り越えて、共に生きることができる社会づくりを目指すアートNPOです。多くの人を巻き込み、個人の持つ文化の発信・創造拠点として「たけし文化センター」ほか造り上げ、目に見える形で、まちに新しい暮らし方を発信しています。

鼎談では、発想の転換、社会参加、「支える」「支えられる」ではなく参加する楽しい活動、そして公益・共益性など地域に定着したボランティアのあり方、役割、可能性に関して述べられました。



浦川会長と松田理事@交流会会場

東北福祉大学の食堂での初日の交流会では、立食形式で多種多様な料理と酒類それに地元の踊のパフォーマンスがふるまわれ、初対面の方々と挨拶・名刺交換し、学生さんとじっくり話す機会がありました。

9月8日 第2日目 第4分科会

【孤独や孤立をふせぐ豊かな地域づくり】

浦川会長は、人数が約60名で最大で最も興味のあるこの分科会に参加しました。3名からの事例報告の後、「どのような働きかけを行うか」と「どのように展開してゆくか」を議題に、事例報告と6名毎のワークショップ形式で話し合いと全体発表がなされました。

第5分科会

【災害時のボランティア活動を考える】

松田理事は、災害関連の活動をしているので、この分科会に参加しました。前半の実践報告では、仙台市社会福祉協議会の春由美さんから、東日本大震災の災害V.Cの運営方式を詳しく説明してもらいました。現在の運用方式の話もあり、特にマッチングを素早くするために、今は挙手方式ではなく受付順でグループを決めてから後で調整する方式になっている所が、久留米市災害V.Cの参考になりそうでした。次に、大崎市社会福祉協議会の加藤大介さんから、長期的な全国各地の被災地支援に携わってきた活動の話がありました。特に、能登半島の支援の話を中心に専門的なボランティア活動だけでなく、炊き出しや物資の配布などの共助による活動の重要性の話がありました。

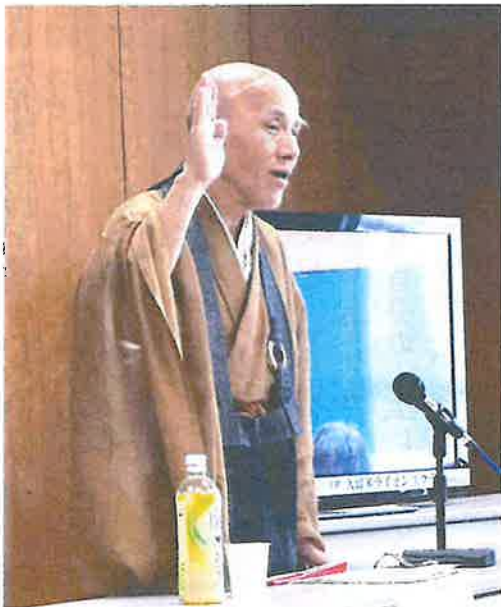
その後のグループワークでは、共助について話し合いました。私いたグループでは、石川県情報共有会議を担当した石川県社会福祉協議会の職員さんや、去年の久留米の災害や能登半島の支援を下さったNPO法人国際ボランティア学生協会（I-VUSA）の幹部の方などが同席していて、共助に関する様々な角度から有意義な意見交換（災害の規模や種類、地域性、被災者の状況）ができました。

《梅林寺住職 悠江軒老師法話

「私でなくて誰がする」》

今年度第一回の交流学习会として、2024年7月12日13時半より、26団体から会場51名とオンライン2名の参加で、梅林寺から悠江軒老師をお迎えしての法話を企画開催しました。

初めに、浦川会長は「ウクライナ、ガザでの戦闘、世界状況は殺伐としている。国内では物価高騰など憂うべきことが多い。人類が進歩しても戦争が繰り返されている。もう一度生き方を考える機会として今回の交流会を企画した」との趣旨を述べました。



悠江軒老師

老師はまず、大阪で生まれ、通天閣と吉本を見て育ったので口が悪い、ふるさとが抜けることはない、とご自分の生い立ちを紹介。女性

専用車両に乗った失敗談で一同を和ませ、本題に入りました。

「人生100年時代、年齢を重ねた時にどのような人生を生きてゆくのか、が問われている。人が持つ『欲』の話に言及し、人というものは、誰かのお役に立つ、お役に立ちたい、という願いをもっている。人には五つの欲がある。食欲・性欲・睡眠欲・名誉欲・物欲など。その欲望が悪いというわけではないが、欲に引張り回されると、肥満、病氣、新聞沙汰になるなど、ろくなことはない。欲に取り憑かれるとコントロールが効かなくなることがある。名誉欲、人からよく見られたいという気持ちはだれもが持っている。いかに自分で自分をコントロールしていくかが難しい。」

どう生きるかについて「心身一如」について触れられる。心と身体は一体であることを観音心得3箇条として紹介。

① 人の善し悪しを見ず、口に出さない。
人のことは置いといて、まず今自分自身はどうか、何を考えているか、自分に問う。

② 悪いことをしてはいけません。

明るく生き生きと生きるにはどうするか。年齢を重ねても難しい。「俺が」「あいつが」「社会が」と他のせいにしてしまいがち……わかっちゃいるけどやめられない。善は努めてなすべし。気がついたら自分が率先してすること。

③ 平等の大慈悲

慈悲の心とは、「あなたが嬉しいと私も嬉しい。」「あなたが困っているなら私には何ができますか?」と思える心。
かつて東日本大震災の避難者をお寺で受け入れ対応しようとしたことがあった。お寺で何ができるか考えた。

高齢化が進み、若い人を活動にどう呼び込むかは課題であるが、若い人と対抗しない方がよい。子どもというものは親の背中を見て育つ。子どもや弟子、部下、社員を育てるのは共通したことがある。まずは自分自身が楽しくあることが大事。乳児は肌を離すな。幼児は手を離すな。少年は目を離すな。青年は目を離せ。心を離すな。と言われる。自分自身が周りに身をもって示すことが大事。

ボランティアに必要なのは、お金ではなく、温かいまなざし、笑顔、優しい言葉使っている。言葉は柔らかく、いつも自分の心を穏やかにすべき。常日頃からボランティア活動をされている皆さんは、体を元気に心穏やかに楽しくお過ごし下さい。そして4つの禅宗の戒めを紹介。

- ① 決まり行い尽くすべからず…ルールにしばられすぎない。
- ② 勢いだけではなく、余裕やブレイキが必要。
- ③ 福を受けつくすべからず。独り占めしてはいけない。

④ 重要なことだからと言って、すべて言い尽くしてはいけない。
解き尽くすべからず托鉢の時に唱えてある「法王」を導師の心に染み入る美声で聞かせていただき、法話を終えました。

【アンケート結果】

- ・ 講演は楽しい話して思うことがたくさんありました。今後の人生やボランティアにも大変参考になりました。
- ・ 日頃から感じている事を面白く伝えてもらえて、非常に参考になりました。
- ・ 楽しいながらも、自分の人生において、ためになるお話をありがとうございました。
- ・ めったに聴く事のできない話をわかりやすく、たのしく拝聴できました。特に、楽しい事をおしえる(自分が楽しむ)・身が心为一体となる事が大切。
- ・ 法話は難しい話なのか??で興味本位で参加させて頂きましたが、親しみやすかったです。
- ・ 大変良い話しを頂きました。余年いくばくもありませんが、今だ足らぬ身に芯まで響くお話を頂き、余生の生き方を学んだ思いでした。ありがとうございました。
- ・ 楽しくさせて頂きました。いくつになっても反省しわづれずにいたいと思いました。

2024.7.12 久留米市ボランティア連絡協議会 2024年度 第1回 交流学習会 梅林寺老師 法話

アンケート集計

デジタルデバインド調査結果 (回答数25枚)

項目	LINE			Zoom			Eメール		
	可	不可	無回答	可	不可	無回答	可	不可	無回答
回答数	18	1	6	9	5	11	11	3	11
割合 %	72	4	24	36	20	44	44	12	44
不可/無回答割合 %	28			66			56		

デジタルデバインド (いわゆる情報格差) 調査結果

年会費納入のご案内
当会は、加盟団体の年会費と社協からの助成金で運営されています。現在18団体が未納です。ご理解のうえ協力をお願いします。